

近江縣物語

卷之五

~ 13
3301
5止



へ 13
3301
5

近江縣物語卷之五

石山寺

源の頼光朝臣と少少清和天皇の御支流なりて御祖
父六孫王經基王なりて也源氏を始りてより代々朝家の
御守りとして忠勤とあせりて事なり此君武威の逞きの
なりて和秀の道と之好むひ下とをいへせり内心かく
たりのくはる矢とほほの者ハ君も世もあかりなりと草
は風吹くりし如くはひき従ひて敬ひかへり奉りてはは
盜賊國とよおひりてさつがれを京都よりありて四天
王などいふいふも武士よかほせて昼夜自皇居とせり
此時御願望の事なりて昨夜より石山寺にありてせり

大正十年八月廿九日
本大學出版部

近江縣物語卷之五

今日、客殿に入らして、湖水を眺め、おのづから、由は度乃
 か、よおつれも、櫻のたより、咲けり、と、海堂を、あ
 り、あ、め、い、そ、だ、ん、山、様、と、い、ひ、か、も、時、を、と、り、て
 い、こ、舞、い、ま、る、と、い、ひ、つ、き、乃、侍、御、前、ま、あ、り、て、安、世
 ま、の、い、ろ、よ、い、と、や、せ、を、や、ぞ、御、前、め、を、召、し、ま、り、る、安、世、梅、丸
 と、い、ひ、ひ、出、て、ら、や、く、あ、く、寒、温、を、述、て、か、し、ま、り、頼、光、梅
 丸、い、め、せ、つ、け、の、い、ろ、か、い、何、の、い、ろ、の、い、ろ、の、い、ろ、安、世、答、て、ま、り
 あ、る、い、は、若、者、の、い、ろ、時、より、お、の、れ、り、し、に、養、ひ、置、て、教、て、
 い、ひ、め、ら、ま、し、つ、き、は、か、し、き、り、の、い、ろ、文、武、の、道、を、い、ろ、い、ろ、あ
 り、て、い、君、は、推、拳、を、奉、り、ゆ、く、い、御、家、人、の、數、も、加、へ
 け、せ、の、い、ろ、い、ろ、い、ろ、今、日、め、い、つ、れ、あ、り、て、い、と、申、せ、バ、頼、光

い、ろ、あ、ま、せ、め、て、器、量、を、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、の、い、ろ、姓、い、ろ、い、ろ、名、ハ
 何、と、い、ろ、ま、う、と、問、せ、れ、り、安、世、は、い、坂、上、と、い、て、姓、は、呼、ぶ、い、ろ、も、
 實、ハ、本、姓、を、い、ろ、い、ろ、い、ろ、梅、丸、と、い、て、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、
 り、け、の、い、ろ、い、ろ、安、世、も、時、世、を、い、ろ、物、語、も、あ、り、と、い、ろ、い、ろ、い、ろ、
 い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、
 山、賊、の、い、ろ、い、ろ、い、ろ、物、と、い、て、人、の、あ、つ、と、鬼、の、角、の、い、ろ、
 い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、
 梅、丸、手、に、い、ろ、い、ろ、わ、け、て、つ、く、い、ろ、見、て、申、す、い、ろ、い、ろ、角、を、い、ろ、い、ろ、
 り、ろ、い、ろ、西、洋、の、い、ろ、歐、羅、巴、の、い、ろ、西、小、の、い、ろ、臥、兒、狼、德、と、申、所、の、い、ろ、
 い、ろ、い、ろ、海、中、の、い、ろ、大、き、い、ろ、魚、の、い、ろ、い、ろ、魚、の、い、ろ、鯛、の、い、ろ、よ、い、ろ、生、ひ、る、
 い、ろ、い、ろ、一、の、い、ろ、牙、を、い、ろ、い、ろ、長、き、物、を、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、い、ろ、

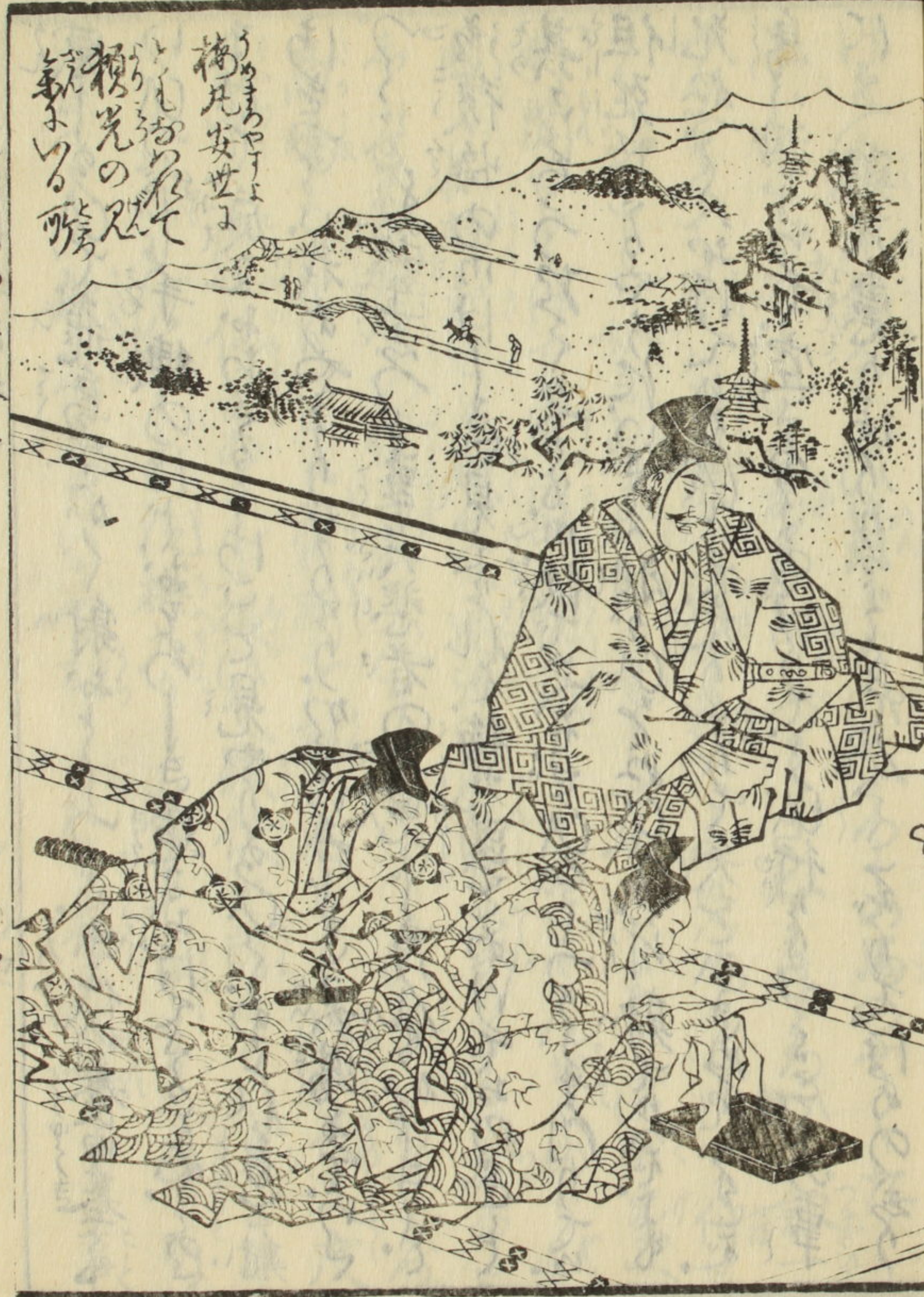
近江鼎志言巻上

物と見えそゆといふ申せを人々魚の背角はかむりの角めき
 くる物あり事少も及むびとて梅丸が博識あるとほ見えあり
 頼光もねて此角につきて思ひ出る事あり書の泰誓言
 如崩其角といふ文あり人々角ありをそらつべし此文
 通トハ角ハ詩に所謂麟之角の角ありて厥ハ蹶と
 ひしを地よつる事しおぼし既ハ文選ハ受化而蹶
 角ト見テ漢書ハもさる文字見てと申せば大まに
 興ハ入のひてと此の疑ハ一時はひくけぬ角はつきてを猶
 問べ兒事あり萬葉集ハ角のふくれりハ詞ありハ
 かり物をもとのこふふあせハいさ覺悟仕ゆハ但ふ意

の女と唾りてよもたる哥にてゆむ角のふくれハ男陰のこ
 かるべくやともおぼしと申せをそらつべしあひひと
 して詞もあやうにすゆとそらつべし梅丸が頓智とりそ
 ちせもひかりとそらつべしけつらとびらぐりてちハひくやと
 のこまを安世学問のいと後江に射させを射させを以
 きし申せをちとそらつべし梅丸が射矢とりて授け
 るハ梅丸手にとり拜して庭に射させを何とつらつら門
 らんとりそらつべし湖水に射させの羽をのりて飛きたる
 と見あひてわれ射ておとせとのこまハ梅丸矢うちつぎハ志
 一ねしひくそらつてをちなるにりやひびとこハ庭あま
 けと落つて射させと聲とあけてむむ頼光珠

江原物語卷上

二



うめまろや
梅丸安世よ
ともおのりて
頼光の忍
とる所

感^んのひて飛鳥^{ひてり}をか^く射^いか^つつ^つ末代^{まつしろ}の養由基^{やゆき}も
 りひつべし手練^{たね}のほどおそろしき逆^{さか}まおぼへたるもあつた
 まひて庭^{にわ}よおちるるもあつた見^みやりもひくあをれも射^い
 あきつる我^{わが}あやまりのりなりかまひみだき^{れい}買場^{ばいばう}あてつ
 つらや殺生^{ころし}あつる事^{こと}大^{だい}悲^ひ者^{もの}の由^{よし}覚^されぬもか^つつと
 後悔^{ごごい}のゆけし見^みこられを梅丸^{うめまる}頭^{かぶ}をあけておのとも
 其^{その}あつたつたもいさむ由^{よし}談^{だん}でせむをせむか^つつとま^まりては
 但^{ただ}死^しせざるやうにいさう羽^はぐひをぬひる汁^{じゆ}射^いてあをよも
 死ぬ^{しぬ}べくおぼへいをびとそ走りもりて矢^やをひきぬれしを
 鳥^{とり}の羽^はうちて空^{そら}さるあまのぼりてとび行^ゆりか^つつと事^{こと}
 にき遠^{とほ}れ慮^{おぼ}りありりるよとて人^{ひと}をこぞりてほめあり

けり頼光^{よりみつ}斜^{しや}めらび歎^{なげ}のひてふらの馬^{うま}のやうにた^た
 まし地^ちを庭^{にわ}よひき出^でさせぬつらとねまきあひは^つ一^{いつ}
 かりとて是^{これ}は當^{あた}坐^まの引^ひ手^て物^{もの}をよめりりあて仰^{おほ}せ
 りらおこしが如^{ごと}き物^{もの}我^{わが}郎^{らう}等^{らう}とすまよあらび公家^{くげ}
 奏^{そう}聞^{もん}をとけて官^{くわん}爵^{じやく}の朝^{あさ}議^ぎすまかせんぬこのさび
 國^{くに}くに蜂^{はちまき}起^{おこ}せる賊^{あし}等^ら退^{たい}治^ちの宣^{せん}旨^し蒙^{もう}りる我^{わが}
 あせせる藤原^{ふじわら}の保^{やま}昌^まあせんなり日^ひあらびあてま
 高^{たか}嶋^{じま}とこりりりる齋^{さい}明^{めい}と討^{うち}とくし此^{この}は其^{その}支^し度^ど
 最^ま中^{ちゆう}の由^{よし}保^{やま}昌^まあせんは従^{したが}ひて賊^{あし}徒^たと討^{うち}とりて名^なをそ
 むとハ忠^{ちゆう}とびやしの後^{のち}梅丸^{うめまる}ありあて申^{まを}りる齋^{さい}明^{めい}
 けりこの敵^{てき}あてをいりて討^{うち}とりたく存^{ぞん}いと嬉^{うれ}しき事^{こと}

近江縣物語卷上

四

と取りていふが勢も加下さくしとを頼光我家人
尾張國よすめる者共ふはく編あつてつうたは彼等
とつて軍と起し攻の序んず前後より相えし
て攻んよの函徒等もあつてせんといふはへ
本づれの内裏の守護よいぬりたるが今より都へ
せんわきの保昌のちんの營に至りて軍に従ひ
出陣すべしとのさふ安世よりつて梅丸もむらひ
我かこのからんが帰つて蘭生もいへ語りせせて
悦をせんめさく凱陣の時を待て對面すべしと
いぬ申て安世のりと来し道へ引くも梅丸は猶も前
のりてさぬ軍の評定あつて終つる鎧うちまて馬

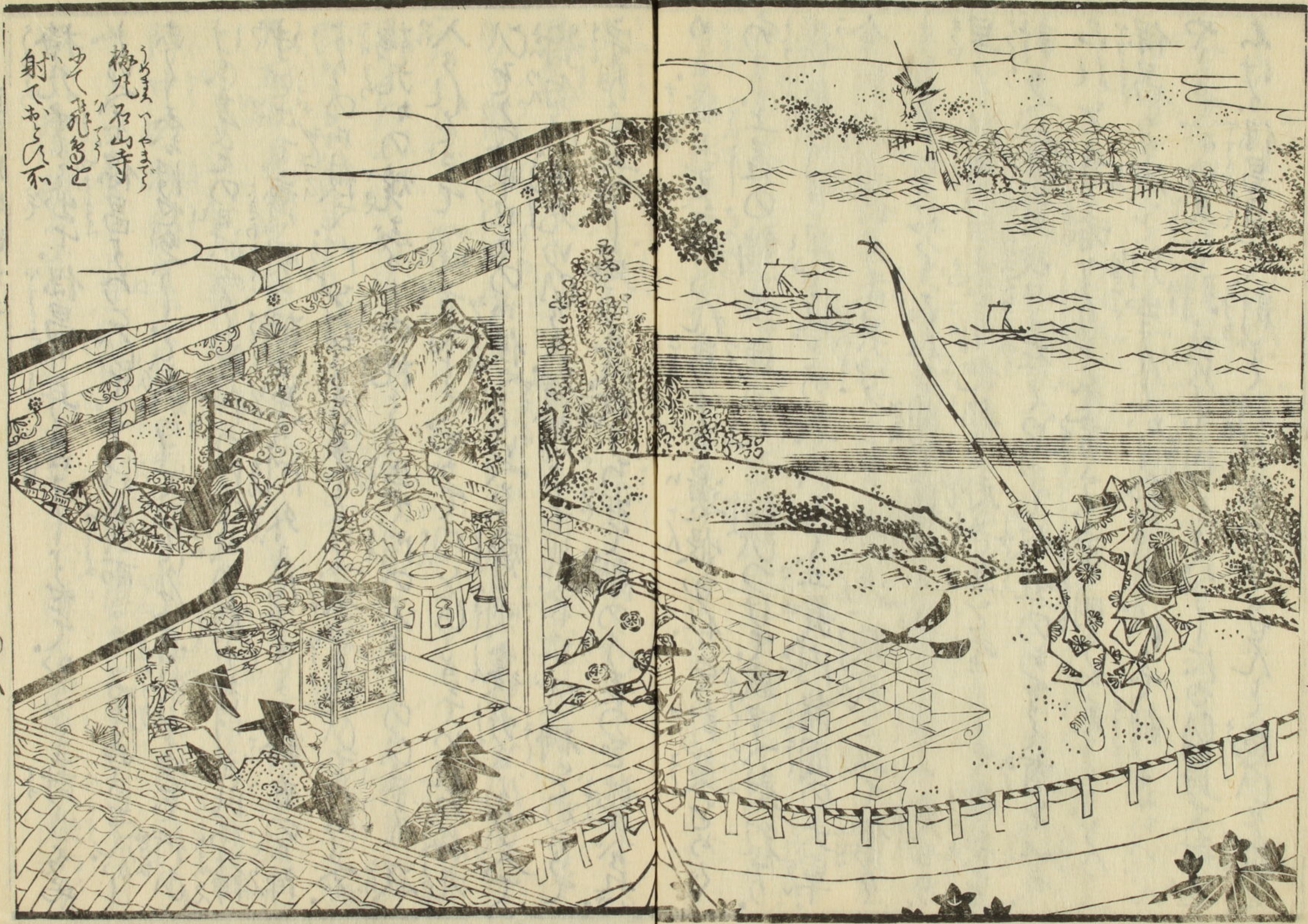
日おのり保昌あそんの館へしとせ行りかこし保昌
待とりあつて子細頼光あそんの書簡あて取りぬけ度
乃朝敵といふは我を保輔よの者さびは甥の齋明
あつて彼等狼藉のつてりたる人民穿籠して安
事をしこむるもりて某強は討手とさひつけ罷下り
りた討策をさばめしは蒙りてしぬんごつ
かこりよふ梅丸も手をつて御軍勢よくつりぬらんも
あつてそのつてのつてんては役よききたるつし
あひあつてあつてくそあつていふ保昌梅丸を長押
いざよひ萬卒の得やそく一將の得がくは辺我軍
とたせけつらんよ今度の合戦勝利たがべきにあつ

とて大まにあらびて益より出さぬくまきやうし
志りのとれり保昌が軍勢催促する所ひを爰より
居て日とえしとて出陣とを志けり

○田村將軍

はても藤原保昌朝臣ハ在京の武士四百余騎と引率
しまづ齊明とちとんと。近江の國高峯の所とせ
りまよとてでぞ責たりの。賊徒ハ山野と家とせる。命
まづびのわがま者多しとせり敵と物ともせび無二を
二一とせまざれば戦いさし京家の武士共もすこ
りめれてをえとけり保昌此体を見て今度の計手
某を承て孫向ひるかひもななく二道はより賊徒の

りよ数日とあうん事を遺恨をれとて計策とめぐ
りし上差の鎬は二通の文と結びつけて城中へ射れり。
齊明ひき見るとの文はいく。五畿内諸國の大軍
今朝出陣のう。其少しあり。貴邊極威を以て御
とも多勢にぐれを圍を敗北及むん事一定あり。
早く此察と公く他邦へ赴き生と全くと後禁と
計り保昌此攻口は在しとて。叔姪のちやと有とて
たれと告る者ありとを書る。齊明うち見ると。なん
保昌が我を引出さんか。またるなり。いと計よわらん
やとてかの文を引さる。同くさるにわひつけて射返
えける。保昌見て計ど行はず。いふせん。愁ひれを



梅丸石山寺
少く飛多と
射ておとす

近江源内吾宗上

近江源内吾宗上

七

梅丸すゝて出て保昌が身はさうして計を
 とりて保昌よりさびてさへ貴所はまうせまわらんが
 いくさおほせまうとさうかいつていそぐに其計を
 けりてその見せしめを待つて成の刻とおぼし比梅丸陣
 中に出て齊明が柵は突り門外またすして鈴鹿の陣
 よりの中使の門をさきまるとして城中疑ひてたれを
 梅丸かの焼くものれとて出て門のまきものひまより
 入らんをさへハ味方とてやがて門をひきまていれぬ梅丸
 ひそくに申せよの中使のしりてを齊明寝所よりさび
 對面は梅丸のいさる得輔やていハうをさび柵をかき
 守りまうとて日いつて戦うち出て敵のうまろを籠るはれ

其時ち出て戦ひのまうとて左右よりえゆとてうらん
 保昌がかうとりえん事代衣の物を探らんより安ら
 かく亂軍の中をさへおほさうの文がわらへびとて
 見えたりたう紙より出てつてせバ齊明よりて水
 見えバあうくのうりて有まかへくもさき保輔が手
 跡をさびいよくこめてけて陣中を留置ける夜明て梅
 丸前々見えたりありたうめえりてさへさるる
 その日もたれて齊明梅丸をさねまて酒かどすう保輔
 陣中の物語などせしめておのれも飽きを耐てうち
 やりるあつるま子の時るは俄に陣中に火おこりぬと
 つぐ齊明おとろき起出て見せバ陣中四方は火燃あがり

たり城中之者とうとうさつぎてうちけえんとするに折あり
風あしく吹く炎あ入りよりえきりだせんかこぞ我
ち死よと明をひらきて逃出一ぬ保昌四百余騎
大手の攻口を圍ませ手勢の中より齊明をうく見知る
兵八十余人を勝て搦手をたふる事二十町余の間にて
の田乃畔この木陰に五人三人づ伏おき一組は一人は
まゝ貝を腰にさひつけ齊明と見せしむる貝を吹べし其
時八十餘人乃兵一度よりせあひていけとてをかせり
けふ此時齊明城中よりありえび信濃路へとうろく郎
等二人貝して遁れ出や十廿町落のびて城の方を見
返りしれ火さるりよりえのぼりて敵味方の岡乃聲耳矢

ちびの音おびさしく聞ゆまゝの強盗もあらおされて行
まゝふり待つけたる保昌が兵あるせの貝と吹くそバ十余人
集りきて齊明を中よりのころかろんとひりたり齊
明のむかひよし死よのびひは難を勇とて戦ひたれど
梅丸が射る矢眉間よりほり眼くくして遂にかけらとせり
保昌斜めをぶらぶらびて明を都へ引べしをきびしく敵言固
しせらるる矢疵ふくそやうらむるを待たせり死せら
賊等多衰丸調伏丸夜又太郎金剛二郎ら頭を断て齊
明と共に梟木をのけりる此度の勝利はひとは梅丸軍
謀よりなりとて其功を賞して官軍を感へありけり
猶これる残黨をあるとてあざむく陣をいすたりひてを

日と過しる。齋明が二黨じびりせし。近郷の百姓等、
 めて安堵の思ひをなす。山たふかされざる者も、資財道具と
 運び返し、さびりよの家のよ帰り住て、いよは保昌朝臣の
 武功を仰ぎたしとびる。此時梅九郎等拾騎をとり、い
 つれて保昌もあつて、いよの神崎の里に至りて常人が家
 とをがし見らる。安世が家と我物とねしをいふと、何月か
 けりて、馳の無き間の貂はりのとらふと、いよのいよ
 うにうし居り、おほくの人なりはかくぬびよのいよの
 世またやすく家居ありて、おほくの住居す。すまは、い
 ねど常人がねよか、ねらが社に入て、腕又あつて、いよの
 色は同類のなると、かぞへられ、盗人との手ざし事をせむ。

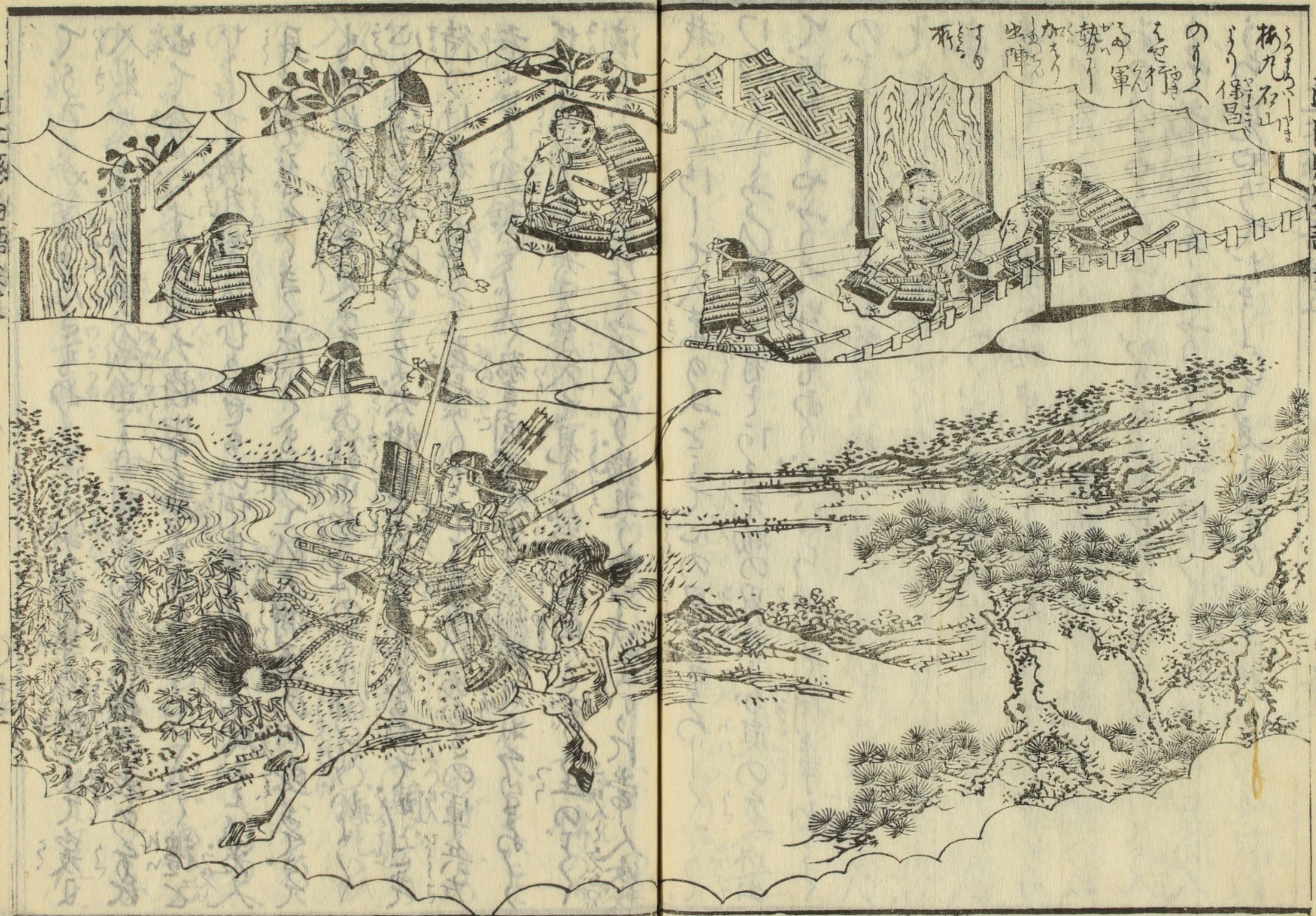
金剛がりとつも、ごうねあまつらつて、いびて、いよの
 人をいよやがてうけいませ、罪をゆるして、あつて、いよの
 とねり、梅九郎二十町をり、いよの衣服ぬぎて、いよの
 つまや、いよの麻の衣着て、いよの常人が、家と往
 くる。案内をもて、梅九郎を、いよのいよの身とあり
 て、いよのいよの田樂を舞て、いよのいよのいよのいよの
 いよの見参り、いよのいよのいよのいよのいよのいよの
 聞いて、園生が事も、いよのいよのいよのいよのいよの
 園生、いよのいよのいよのいよのいよのいよのいよの
 きく、いよのいよのいよのいよのいよのいよのいよの

夕ひよりて宿りまゝのついでに其夜盜賊の入り
 来ていづくへ奪ひ行てゆくもあつて成てゆつて常人の
 思ひるはあつて我のつけやりやう俄異心を生じ。苗
 生と奪ひてあつて他國よ路ゆきりるらん。いふもあつて
 とり返さざるやいふもあつてはつて梅丸は向ひて
 さそくふらふ事承りていひさぐて見奉る入る
 夕もこのよう物語せまほしくもそのやうにがた
 客入
 まつたのきあひいふはまを對面あるうめといひまづ
 たちて入ると次奥の方に入あつていれあつてあつて
 笛鼓をうしてあつて梅丸常人が袖をひいて客人の
 床へと移れをいひてをいへが田樂のひとあつてあつて共

一かゝるの奥のるまゝ田樂する入る西三人せうど置る。田樂
 堪能ある音ありあつていひて田樂ものわづいその
 宴席をこまけあつていひて田樂ものわづいその
 の肉つてもいひて入ぬれなりさあくの田樂を終りて梅
 丸ちりさつて出てせんす萬歳の酒ほくといふ曲を
 ろく舞をとりて見せられ。満堂無入てあつて田樂ハこの
 人よつていふ異人のわづらふにさあつてあつて
 一梅丸をいふのありて今いしてさあつていひて
 せむ。常人樂屋に入来て客人のわづらふといひて
 あつて興あつてさあつて見せるといふ梅丸のわづらふといひ

此のころ田村將軍より一曲さうふこれと尋て此處より
 入申のさへんこの後巻きて出さるる鐘のやがさびあふ
 常人何心かくぬりこゝろ入ておすもその鐘ふぞりち
 出ていつてこれをやがてをほひさうをさへ立出く尋すあり
 してすまの山の賊徒さびひりてを詠つてて聲かく
 のびるをさか人がりりて身とす申してをさめりなるが
 一表のさへ俄ささけえかある何れをともを大將軍
 保昌のそん入奉りもさへいつらく常人をさるきといそさる
 事わんがりにさくちてさうなるあやなむといひつゝ門の
 外よりさる士卒のさちめびて鐘のさかりのさうさくあく
 何ひて螢さどのさびかやうに見ゆ大將軍馬よりかりあひて

我家をけりて入奉りよとて心の鬼もさるりくちりて
 けぬくさうひてさる者といへ見物の男女さか庭の方へ逃
 て垣かやがりておもあり又いさちぬりて何事ぞとく
 のぞれをさめめも有り梅丸常人に向ひてさね驚馬あひ
 そかのれ生むひてやましく候へ出まわせんを立あは
 常人鐘の袖をいさくをこのさかあひそ大將軍に面
 奉りてげまの身の物申さきさああるはてハ我さいみ
 ち見罷あやあんと外へ逃さるるとり又聲さ歯のね
 ありびさうにさうがりあふれけらうらすがしてさ
 とて常人が手をさうひてのどくといゆて出さる人
 うち見やりてなきひも身まをさる一定梅丸めひさくられ



梅九石山
より保昌
のゆく
る軍
か
出陣
不

近江守言

近江守言

てらきめやうんさもわぶ何れ大將軍の何とて爰は
 入来りすと障子のひまより覗きぬるに梅丸表の
 出て會尺すれを大將軍座よりきあひやくとく禮を
 して梅丸よりちむらせも何事か物語をておひた人
 耳をそぞろきくにも聞へば大將軍の所寄りてさ
 もしねり足是れはの程の程はのぐとさゆいよく
 心もえずうかびぬる大將軍又あきまひてかこ
 待つ春の人とて出あがりて出ておひあむこの軍兵左
 右よりびいていよく強固とてゆく行林丸おりのま
 せて立歸り奥より入て見えば常人面はさかしく土のど
 流くはちのたてさひより梅丸よりついでいに常人は我

師のそとをさうびぬずびておちあがれておわいばざの者
 とくかづいなるも我師安世とのたかしくよめ一相傳の
 きせがハは鐘をてあうりてをいよく膽づりてさへハを
 のりねと思ひく逃出人とすと梅丸をわげその
 とも乗りてかきよとよめり表の方より士率十騎をり
 入来て常人をとめておえたくそそまりのわけの梅丸ひ
 りて我よりめり石のりて汝を捕へられと汝逃かす
 のもさうびに鐘いりよあすばんとあひをりてねくか
 ちるなりとくを常人恐れて魂も身もさうびさしを
 けりてさうりハねハ汝俄よりのぼりてつるをもと
 したくを菌生を吾毒とす汝も安世もあき物とて

近江縣誌卷中

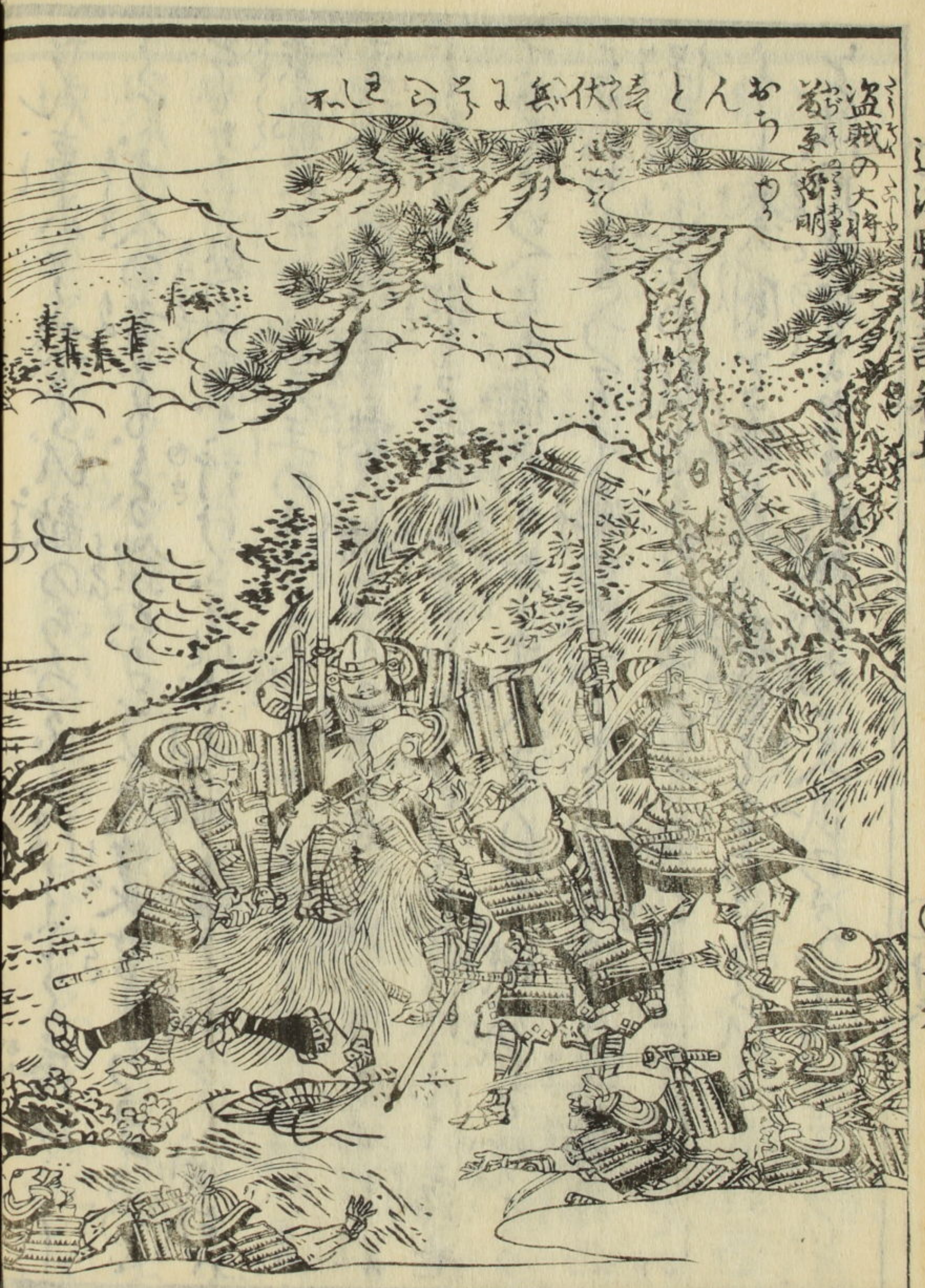
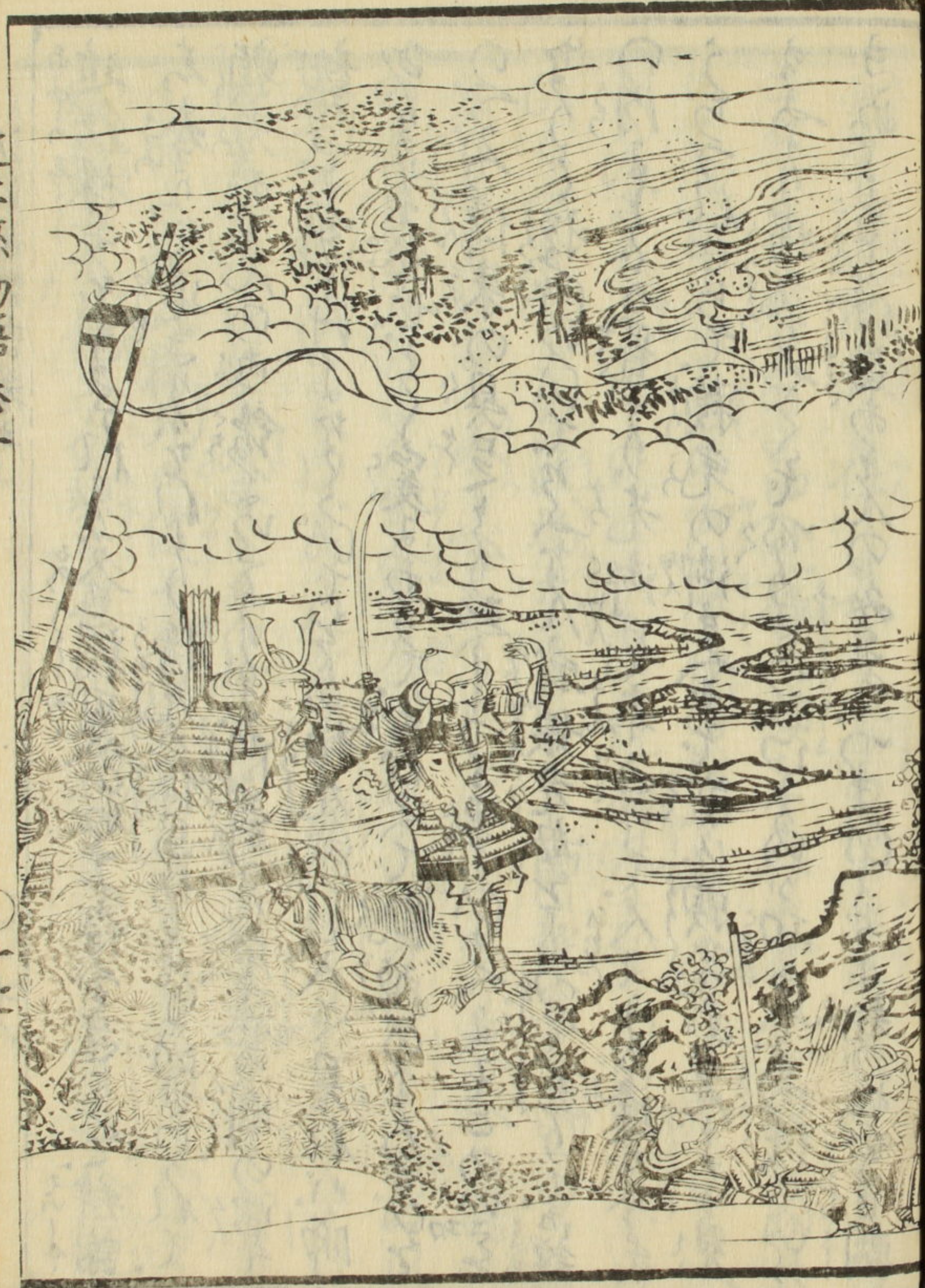
十三

男ひたりとにその事ひともかぬりて鐘をとりかされつゝち
 ちしゆよ夢まよもかりとあつむその鐘氷の底も沉免
 火も入る焼てまゝと吾ぶらうりて出く汝もあせ返
 せーおきあきままでおろかりーといひて足すりあて砂
 うさひ梅丸八田樂ももぐらちすて置る扇よりわけも
 おしひき三尺の劔の光ハ氷手にありとたふらにさひひ
 郎等ども笛つごもどちんでまよりて一張のちの焼カハ
 月をわたりたりさうひとあして一度まると笑ひて出吊人が
 繩とりてさうられいさして出行ける後まきけを常人は
 公家のいささとしてきうが寫へるうらなれんとて
 ○うんげ

おに尾張よりありて嵯峨の左衛門ハ梅丸よりひつけ
 都(中)とてやりて後やまひとてをさるる天宮司
 奉りてのひさかた光朝はより定頼は使あつりて國は
 源氏の由縁人をういそんをむひて賊徒をうあらうは
 べきうし御説ありて此國の武士どもその支度あて
 けを製しあひ隠遁の由身さうかると時いひきこりか
 ぶれあつていそんをうあらうひて函徒をさしあへん
 き物の具ハ所持あてつばえらびとせ強く用ひさる
 けだ場門あつてさうらうを告めひつれ我老よりと
 みもく朝敵とあるやあら見のぞきまあらびいそ
 ひろいあんとしてさうらうの武士と催促あつて三百騎を

集りたる陸とゆつて日数かりぬへとしてびつぎの濱より
 船より舟のりてさち伊勢國よかりけりいまはひ狂まて
 ゆりかひのてり藤氏の武威のまかりきことときおらある
 ぬひびと軍勢の向ふこときくより蚊の子をりひ如く十
 方ちりてを外せりた濁の軍勢と下知あて鈴鹿山
 と向ひりるよまきの高島の柵やれて齋明の外むね
 たのそと者ともおもくち死あぬとつこりて盗人も
 ともりあひ如法貪慾のころあり一旦は従ひびきりし
 かく危急の時よのそと誰一人も踏とまりをさきま
 いへあをせりるちりりて成て落せぬ今ハ十騎あ
 ありそのりたる袴されあひりるかてをさかくあらは

口ん事かきよべへび敵のちろろはばよとく落ゆべ
 とも十人の者ともさ鎧ぬぎすそ蓑笠うちまきいぐ
 ともちりて外出てを行けるれ天命遁る前び結句ハ
 京都はわいて四天王のよめよ命をわたりるをひ供する
 尾張の國の軍勢ハ柵ちり責よせて岡の声をわけれ
 どおちれ敵もえび人いれてさかをせりるにまろ落せ
 てゆつてを丸衛門下知して火をうけて賊營を焼く
 かせかちをきつりて都の方へとせりるそそ又藤原の
 保昌ハ近江の賊をうらたひらけて梅丸といざやひてその
 り奏聞と逐れば敵感とよあさるびいて保昌
 とは丹後守よかり板柵丸が文武のそんとほらせ多ひて



盗賊の大將
 明
 人
 と
 伏
 兵
 無
 事
 公
 事
 不
 成

盗賊の大將
 明
 人
 と
 伏
 兵
 無
 事
 公
 事
 不
 成

盗賊の大將
 明
 人
 と
 伏
 兵
 無
 事
 公
 事
 不
 成

盗賊の大將
 明
 人
 と
 伏
 兵
 無
 事
 公
 事
 不
 成

近江掾あをやまされたる。各朝恩のかけつけきことと拜謝
去奉りて退きりる。梅丸保昌あそんはひきつりて
頼光あそんの内緒まじりりる。門前八尾張の國の軍
勢いさかへけよわらびて。梅丸門をへて見れば師
ありりる。安世とく爰ありて。生むて凱陣のうらびを
のべら傳来の具足とりて。事いよよをこのい
なりと。梅丸のいひて。わが娘老母をもめりて。内
の内よと。梅丸の御見参。あそんて人々も逢ふこと
ら。つれづれして。頼光の御まをせり。頼光あそんく見
あふり。梅丸あそんをゆりまう。つれづれの功あて。徒たひ
まぬる事。保昌あそんのあて。つまびらう。知りぬ。今日朝

近江掾は仕どむると。今のほど。梅丸頭をまけて。これおのれが功
ゆをひひとく。君の御威徳のかげ。余りよゆと。わら
ひ。あそんて。梅丸のいひて。梅丸はひとりの望まうけ
ひくべくや。との後梅丸。ありて。御説で。梅丸のいひて
なりとも。いあも。奉りまき。やゆをひと。せ。我家は。譜代
の老臣あり。いま六匁余。及びねれど。嗣子あて。明
是を。終ひと。り。つれづれのうら。が子と。成て。終りを。えと。け
や。ん。は。は。い。ん。又。あ。り。や。は。ら。ち。び。に。は。あ。ら。う。と。あ。ん
との。あ。は。梅丸の。後。す。ま。い。は。あ。ん。や。う。は。ゆ。を。ね。と。け。ま。う。
旅館にて。親子の契。な。せ。し。老人の。あ。は。ま。も。異。人。を。親。

ふゆらん事義よおいて安らびぬ此計計すもあらにね若侍の
くゆといふ頼光きていせんさかーはまどいどのが如き若者あ
事老臣どもにも見せむと思ふとれくとのさまバヤうぎの
侍ひきつれて出るといふ大紋よとあげきてる巻ある老
武者れまよ出てかゝる頼光老人のむぐらにまき若者を見せ
むとして呼出しつらり此若武者を此度近江の強賊齋明を
討ごとをみうちほりや未曾有の高名なりたる者なれど見
ありてあれとのさま老武者すかえち頭をあげてめとあぼりて
見やりなるが弱き何とてやおれ梅丸よとといふ梅丸うらを
あげて見よバ尾張めて親子の約をせし暖湯のたきありなれを
あざむかえきて親人いそとく都よのぼりぬいづはらち

をすくやんやうせむひつやとおきりうりてかま頼光も浅
ゆがり多へてさていと親子の契りやせし思をすうらぬ
けれやうならきて父子のむせひせえんと思ひいおそかりり
の多ひてはらうらひ斜あびやうひ梅丸よのさまいなる此りのそ
我家の老臣あて藤原の仲光が身きて季光とよる者なり年比
嵯峨野まかれ住てありい父の殿もひきくつて無二乃
忠臣なりいうはけれも鷹狩のついであれむらちりてさひひ
おとられし事もありきこのさびふらぎに尾張の國よありてかゝ
り責のぼりさるるの我えんやうらめて知らなきいどのさ父子乃
やくと継びし事ハ我心は符合してかえりうらむた事ハ
あらびとゆらうさび大方やうび季光つあんですのまてあ

ちりりて逢いしより親子のちやむいむびりりしとあまわらば語り
 少こそかく思ひがけかく對面あつても偏は君の決りごとかりとそ
 かしを頼光さねし今の程安世が物語をすけを家族乃
 とあつてもおてきたねとあま呼りてのどろ對面すべし
 けれは又新發まどめりといへばあまあつてききみりたぬ
 奉らんそだちと奥の間へいもあひぬ安世をあらはほひて娘
 生を呼りて李光は對面せし李光菌生があらすべし
 たらを見えあまれよき妖の君とまうけつとてふらふ梅丸
 菌生は向ひて衣のうを君はなとてとりあはざりしとてを菌生
 かしこの一間をおえひの伴ひまわらせんと申すどがらうらりき
 身があらぬあまらへばをどり何りかへ松のおもんとともを

うしとの病をすかひておまわりまつねばうらひりきりてゆと
 りと梅丸安世よむひていひるはえは右山あて初めて殿は見事
 入の時君我姓を坂上と呼ば本姓はあわぬとゆふひま
 事つがうたれはくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 をとひまうておまらひま我本姓別は事とあらえはくくくか
 らせりしを安世うらひひて邊をさきき時やんが知りまつド
 かの田樂あて世をけり下り坂上の猿丸の御身のまことの父
 はあつていひは梅丸敬馬といふくと眉をあらてとて人まら
 二十年むらびりりき猿丸田樂して都とのけりて三斗の
 みどり子をけりけり帰りきとてわれは旅してひろひえり
 とて乳をりひて育くやいやひらるが兒のあひらを身すいひ

え一字ありといふ。何ぞ心もいでらん物ぞとちりた人未
はくしてその一児あもかろも出たりき此事ありさ。我のみ
か。一村のちち老るりのいふかよくありてさうその時のひび
子といふ。田辺と。さうらふさうらふ。ちきよ。頼光君の姓氏をとよ
後時つらりてさゆべきありねてついで申つと語らば
我本姓はなほさうりて問わきつらばまよとくを安せられも又
ありえん。さうらふか。さうらふとてのらうつ。猿丸が一品とさうら
やくたれ。ひききて見るとつらば。梅丸。蘭生。むらひて例の品これ
へといふ。蘭生。常にかたつら。さうらひりちて。今も只今これあり
ゆとて。西念法師にあげてさうらふとつらば。安世とあけて。妙念
とあつとつらば。侍とつらば。妙念とあけてさうら。梅丸。妙念がらさう

代衣物よりて封をひきけを三重計封してあり。あわけてさうら
一通の文あり。さうら。梅丸。よの。猿丸。と書たり。さうら。見ればこれ
ハ。このまをの。又あつとつらば。一。康保元年三月十九日。山城の國
舟岡の山。さうら。さうら。ひうひんて。去月て。マ。マ。封
置。一。筋。ハ。其。時。身。と。さ。に。ひ。う。ひ。え。一。物。を。り。と。さ。あ。つ。ら。ら。
季光のびあがりて。何とつらば。さうら。梅丸。と。み。れ。は。生
長の後。ま。その。又。母。ま。め。り。あ。ひ。さ。ま。え。ん。さ。う。ら。も。さ。う。ら。く。と。
さ。く。置。て。の。あり。と。さ。う。ら。も。と。さ。う。ら。梅丸。悲。歎。の。涙。よ。さ。れ。ら。さ。う。
何。ま。さ。び。筋。を。押。し。つ。ら。ま。て。あ。れ。を。ま。ま。の。又。母。の。涙。よ。さ。み
め。と。と。身。よ。ひ。く。と。つ。け。て。涙。お。と。せ。を。季。光。の。う。け。り。け。り。
あり。ち。あ。く。その。筋。は。な。え。せ。あ。り。手。よ。見。見。て。あ。れ。を。我。子

愛丸死する時、うらまへせて埋めたる笏をいふ、その物の
 うらまへありとめを大まにあて不審す、安世うちきより、
 此笏おくりたり、ひい一兒のうらまへせて葬りまるといふ、
 猿丸が遺言をあえて年月をかぞへ見れども、このうらまへ
 する愛丸と名づけし兒、此梅丸をあらはし、やとめを季光
 かへらちありていさく、虎をさうくほせ、うらめ葬りへまは
 せ、かたりたれとも、うらまへせよ、世よ、世よ、世よ、うらまへせよ
 此笏はうらまへし梅丸がうらまへにあり、うらまへせよ、うらまへせよ、
 半くして頭を傾つて、うらまへせよ、うらまへせよ、西念うらまへせよ
 どりて、殿身うらまへて、南無觀世音とたうか、唱へる人々
 驚てうらまへし見れども、西念赤か、うらまへせよ、うらまへせよ、
 涙を滝のやう

よかしくつて、うらまへせて、うらまへせよ、うらまへせよ、
 に見て、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 追つて、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 道理も、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 男あり、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 のうらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 岡山のうらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 人のうらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 至り、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 類、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、
 持、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、うらまへせよ、

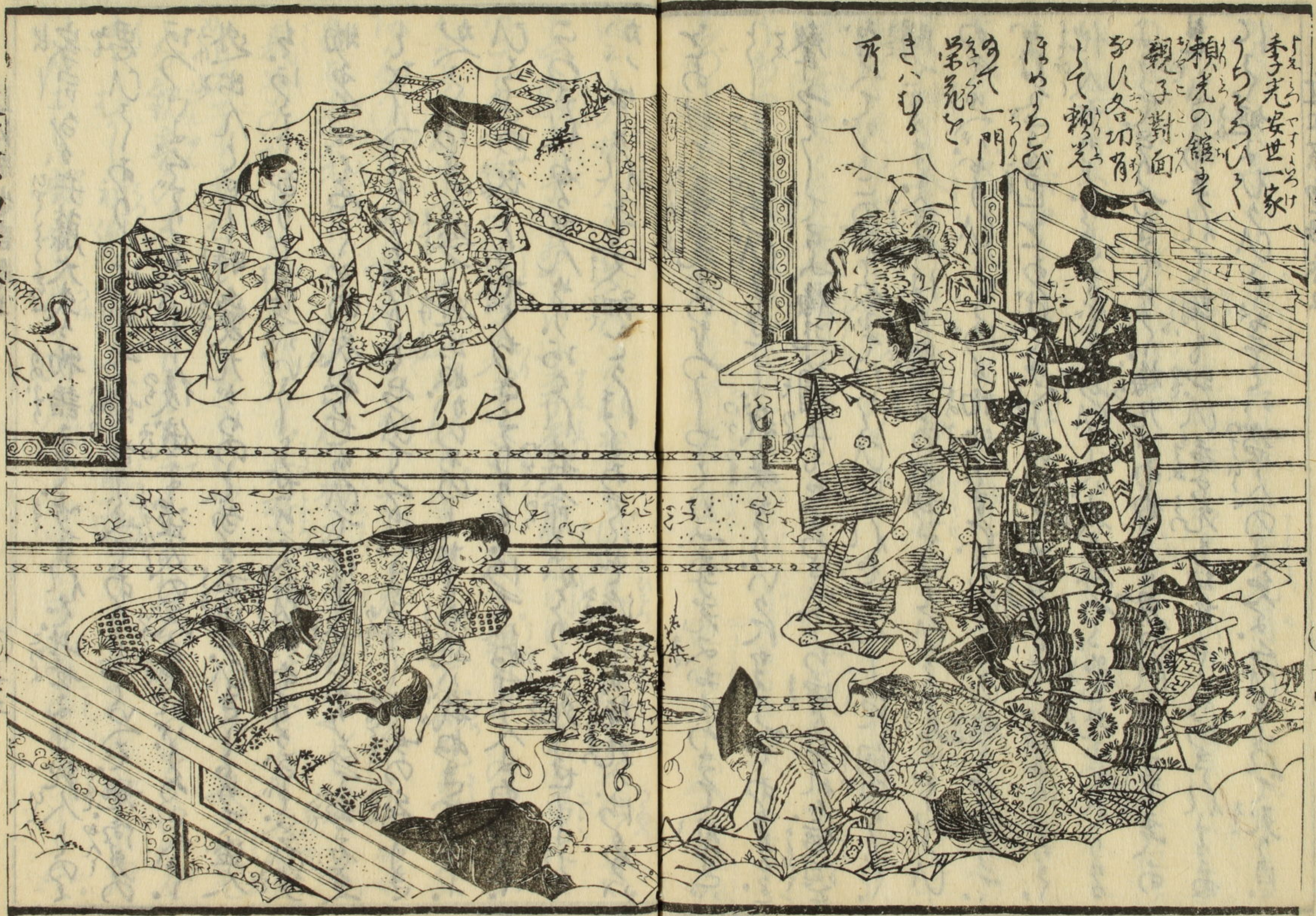
歸らん存せし幼き人の死骸の腰は物の又てくも
 列ぬきとんとせしに思ひのうらみ此兒のうらみ
 ぞらう松とりて旅人のきこふあし見つけり外と
 たるよかの旅人兒をいざ包をひいてゆへんすや
 めてあぢうが程うちあひてふときやつ強力の男
 て四五尋たよりほつと投てけを塚穴の中よち入
 り多回絶せんほど兒と包をいざ入つちうらみ影
 猶のたゆる物やあつとそらうちがりて見てあれ
 たの手はあぢうのゆきとれを両の手よりちてお
 ては其夜のさよ老僧一人来りあいてばあぢう大
 秘めかくへしおのれ成佛すま因縁あれをいまう

わさ地發心修行すべしとの縁と見て夢ハさぬ
 ひすすの道心者と成て抖擻修行してかくて
 ねハ其夜の旅人ハ坂上の猿丸とのぞき掘りて
 丸君とておぢうの吾す梅丸の君命すけられし
 おりてあぢうの因縁とて首はかけたる包ひき
 だそり出て見するを季光をやく手よりちて
 の君より兒がりてさうり物あれありてよか
 巨勢の廣高が筆のあととてさそハ養子と思
 を我肉身とけし子あてけりたることそり
 かく梅丸も手とわをきつと思をびりての
 奉りて事神明佛院の内加儀とて親子互

かしこく志をきく涙あをくればなる季光目もさうして二十年
 まに死にけりと思ひ我子よがささびれけりけり八重電
 の邊木うとんげの咲出さる希有の事とけりつれよ
 一姫のさすまをぢりけりわけてがうれあさむさろよけり
 くまらびせりえゆとぬひひのええさるさるいていのお
 びいて一ばささるとさげを梅九一目的孝ともさるばる
 だに拜一奉さげりいはいある宿世ありとてあさあけて
 泣き泣かまよひとぬのうちさげりくまらさるさる
 何者ぞとて安世障子ありわけて見れば代衣のうをさる
 うちありて前後もあさびやささるびいて見もさるぬべさ
 まづきをり安世さる何事有てさば泣きをさるて姫頭

とあけて季光よのさるやとりの季光又おとあさて見ま
 くとらむつびをせし我妻ありいたるさるてありなる
 聲さるしてさる梅九菌生もおとあさてさる守りなれを姫頭
 おさてがここのひとぬさたるひわをさるや一だ詞のさる
 聞てさる今このほど障子のあさるさるひより来てさるがひ
 わささるさるひささる物語もさるさるこの胸もさるさる
 おほくすささをあげてさるして梅九がさるいおさるさる
 他人ありとさるさるも思ひ一我さるみつるさるおてあり
 よとてさるつさるさる梅九いあさるさる思ひある事さる
 ささるあさるして詞もさるさるさるさるさるさるさるさ
 にく姫よむさるさるさる盗人のさるさるさるさるさるさる

孝光安世一家
うらたのひま
頼光の館を
親子對面
おし各功有
とて頼光
ほめよあま
あて一門
榮光と
きハハ
可



家司の兵藤大夫が物語ありて、少々の世に此世に人との
 思ひをありしに、命がたてありしに、を姫侍の
 所へ、よきごりありしに、後俄に盗人の入事し、うらまへ
 逃れんとせし時、愛丸がめのとある右近、びきとらりて盗人
 を、うらまへとありしに、命がたてありしに、財のありかど、
 物ありしを、かくその衣、ぬせありて、げす女のありて、出さる
 と、きつて、うらまへとありしに、やまありしに、下女の衣、き
 ぬき、うらまへと迷て、逃れぬかのめ、のし、右近に、我ぬきすて、
 ひき、この衣、とりて、うらまへとありしに、うらまへとありしに、
 こゝろ、い、ありしに、うらまへとありしに、我命、よかありて、死せしを
 か、申されしを、又、細と、うらまへとありしに、うらまへとありしに、
 梅丸、は、ありしに、

は、この母人、よきを、ありしに、おの、おの、は、不、不、不、の、侍、き、
 と、て、額、又、手、と、ありしに、よ、よ、よ、か、な、て、同、け、る、い、ら、る、事、に、て、
 は、こ、の、今、日、こ、の、中、館、よ、入、き、て、有、し、と、を、姫、侍、の、ご、ひ、あ、
 え、う、ら、ま、へ、と、ありしに、うらまへとありしに、うらまへとありしに、
 の、う、ら、ま、へ、と、ありしに、うらまへとありしに、うらまへとありしに、
 も、も、も、よ、き、手、と、ありしに、うらまへとありしに、うらまへとありしに、
 義子、の、契、り、と、む、ま、び、た、ら、其、所、に、隔、た、れ、ど、お、と、も、又、彼、を、
 かり、の、子、と、な、せ、し、に、う、ら、ま、へ、と、ありしに、うらまへとありしに、
 う、ら、ま、へ、と、ありしに、うらまへとありしに、うらまへとありしに、
 色、む、む、初、瀬、よ、通、夜、あ、り、時、枕、が、ま、ま、立、お、り、て、お、り、て、
 人、ん、こ、と、安、し、と、告、め、し、に、今、ま、の、ゆ、く、す、ま、の、の、あ、げ、し、と、

夫婦やうくもあそを會てより二びり。梅丸ハ膝うちたつき。
 天と拜きてよりあふ園生ハ先母をいつて脊をたす。
 さすりて何つひ物す。安世かちけり出てめつりといま
 のまのあふ流親子の面對面をいぶくをさくひと
 うけいとしてながとりて奉光ますまああくすんがれ満
 らるりてより二びり。西念のひかり梅丸君と園生君
 いまご婚姻の盃あふびりついで合衆の禮行ひひ
 せんといふ奉光いふ今まをいふ事をもせりといふ
 娘げといふしきよいつつもすちひつれど又君よあそ奉
 であつて行ひきくはかかんがあぢあけひきり
 語らるよおひひけずをぞその障子ひききられん

われはあわど頼光君打あそをい侍臣の面づい
 かすねよ土谷のせ持物もあり又すをぬの臺おあも
 ちよこれのさかあそ持出て人々のまはまあわく
 光のさまひるハ婚姻の被媒はあわが物せずと
 かふ我やうちとやりてあそ朱陳の榮をえんとす
 の後くはかすけさの身よあわりて頭さたあは
 ろがさる。頼光侍臣よ仰せて梅丸園生よかちけり
 うさせまひあふちあけて何なまとい今日のさ
 ひ出に後債のくもといひことおれあ。さ
 乃聲もがよは殿のさかけりといふ海宮
 えて頼光人よのさまひるいふ事ハ障子とつ

てくすすのつそも夜の親子の契りあせし返りてはとの
 親子ありし。これ希有の因縁ありつてなれば世の物語
 ともしぶらんめり。園生が賊管よりとれと成る。智を以ての
 身と汚る。ふび再夫よめぐりあひし女中の丈夫はこそり
 安世が娘といふべし。梅丸くあをれとてなぐ。老と借す
 べし。梅丸が文武は長トらひしと師の安世がそし。の嚴
 かなるまうけりかまて一家よ忠告ひて終るゆんぐりり
 けりや。養意さるべし。めの右逆がまうけりて死し。る。
 返しぐあをれり。西念が教ぬのちいり。親音の志ある
 あり。あもゆりゆりの望固なりし。尋常の法師よと
 なり。かれが生れ出る。田原の郷は。いし。我志の不なり。

かねて又新發之殿の宿志あり。一字のからん。建之の心
 あれむが。こよ一寺とそ。妙念を以て住持とす。右逆
 が亡霊を弔はむ。梅丸がひとちりし。いさく。親音
 の灵験あり。あが。猿丸が慈心のをこそ。より。あはし
 ころ。あが。洪恩あり。かれが遺言の文をうづりて。塚を
 きづ。其あし。その。と。か。め。の詞
 ぶん。い。さ。ら。る。び。泣。は。泣。く。と。い。も。あ。く。び。袖。を。あ。は
 り。ぬ。さ。ハ。ホ。の。世。は。い。り。て。猿丸塚。又。猿丸。さ。げ。を。び
 ば。けて。田原の郷。よ。その。跡。を。その。こ。り。梅丸を。い。り。父の
 住る。白河の家。を。修理。し。つ。ら。ひ。て。う。り。住。る。よ。安世。季
 光。が。り。と。に。あり。し。郎。守。女。を。う。り。あ。ま。り。の。あ。り。り。

よども聞つてつれなくと物りきてつとれをむし
にいまつてあきくくを成りかくて季光安世を別室
に住せ朝暮孝養とこよび侍ていづま子どもあ
ゆきつづけてつとくおまひくすまてりし世の栄
花をきとめ地ぞ一期を返りりかやん此巻の
算子をあげて近江縣物語とふことハ梅丸が住あま
ありて人々語りるをそのまにまつけしむらじあて

近江縣物語卷之五 大序

六橋園のうゝ旅より帰りはたぐのちふつ
りたあちとりのあぐま神つまもあまあま
ころくおのまにひつちちのりえうあ思はり
をにたうしを興ある事にもあまおほのあま
うしあま乃あまのひもあまのちとひ
あまのあまにけけはれいあまあま人のあま
あまあまらあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあま

よきものありしに... 此物語... 伊丹屋善兵衛

夙興亭高松

Handwritten notes in cursive script, likely related to the main text or a review.

軍書小説類藏板目録

大坂齋橋通 南久寶寺町

伊丹屋善兵衛

源平盛衰記

片假名

廿五冊

後太平記

片假名

廿五冊

殘太平記

同

十二冊

四國軍記

同

十二冊

駿臺雑話

平かな

五冊

續武將感狀記

同

十冊

聖徳太子傳圖會

平かな

六冊

補正行戦功圖會

平かな

十二冊

畫本西遊全傳

四十冊

太田道灌雄飛録

六冊

繪本玉藻譚

五冊

同白狐傳

十冊

おわらび... 左衛門大夫太田持資... 戦功... 一世の戦功...

復讐言石見英雄録

全部 五冊

此書三編あり作者各替り四編以下廿九冊あり
二編の筆で記す石見氏を以て通編
三編の筆で記す石見氏を以て通編
石見の主人公の事なり
橋立の復讐本編の作者の新案を費せり
七編の結局と餘計の一卷あり八冊を以て一部とす

刀筆青砥碑

八冊

此書水鏡語の孫亭子の原稿を曲亭の筆削せり
筆削せり
て愛妾の事
盗賊と誣りて殺さんとす
明断各その罪を照して懲せる

室小室の八巻

八冊

下野の室小室の事
忠義の事
新平の事
妖術の事

鎌倉年代圖會

五冊

鎌倉の創業より
宗室の事
宗室の事
宗室の事

鎌倉大樹家譜

五冊

親王鎌倉の事
宗室の事
宗室の事
宗室の事

武藏坊辨慶異傳

十冊

羅中が水滸傳の面目を撰て變化する
叙向みれば甚與ある小説なり

大内多々羅軍記

六冊

大内義隆の隆者風流より
倭智浪人服紬を羅ふ臨れそ書を君に進

繪本金花談

十三冊

雪鏡談

十二冊

同二嶋英雄記

十冊

同彦山靈驗記

十冊

同龜山話

十冊

同合邦辻

十冊

同淺州靈驗記

十冊

同金毘羅神靈記

十冊

同誠忠傳

十冊

同孝感傳

十冊

同顯勇録

十冊

同奇縁傳

十冊

同忠孝美善録

十冊

同伊賀越孝勇傳

七冊

檀之二葉

六冊

むら 妖婦生約の方より 薩尾張の薩賢が
大悪逆を正史に出入せる面白稗史あり

近江縣物語 五冊

花山院の門代あると坂上梅丸が全傳あり
盗賊を系保輔齋の志が残暴に橋安世が
女園生が貞操安世が甥常く邪慾腫病の
梅丸がこれに先づかす謂てあり賊徒征伐
の大將軍系保保昌を助けて賊を平らぐ
近江掾進み生の父母逢一佳話してその
文の妙ありて聞て初るべし

昔語松虫墳 六冊

疑義の以て河内於世の勇士野田太郎清盛安
の勇婦桂子と 織母根が奸海安井筆太が風
悪妻田勝美美里と 世田の家長本海八が妻
松が在木村海太郎と 津崎の遊女木村孝心
松虫墳経塚などの由来とある

今昔二牧繪州紙 六冊

天竺の頂より 普磨三木の城主別所長宗の
甚崎兵衛夫妻の女子と 松山松松の
遠原勇亮と 船松三郎左衛門が好意と高
村の難儀が義兵をとりて後を語りあり

忠孝貞婦傳 六冊

大庭伴織信信は 彼田版右衛門が設計し中ら
て自告一妻の里尼と 森謙三田野助が貞烈
忠勇にて冤を雪だり幕府あり

復讐言千丈松 七冊

近江の七松井逸馬浪人條村大蔵が欺殺
れを尋ね 兩人多年冤の家を覆ひ青柳佐市
ら友ともし 阿波の條村よて志と述し信

忠孝人龍傳 五冊

奥州小田原の長條崎三郎右衛門の
千田民助を欺て松田伊織に斬せし
田大夫と反りが牙民孫が義死し是を冤魂
民助が庶子民五郎といふ童に憑て復讐
させし事を報せり

北野 二葉此梅 六冊

北野 二葉此梅
祇元の夜賊池上七九郎が克悪の孝子
美女と上田三郎が復讐の小説して西妙
年岩見三之丞最候の老人を教諭する
を報せり

十かえり花 六冊

十かえり花
建久年中 出羽の山縣の御士常盤井内記
兼則二男 藤二郎 是人が仙郷に誘れて教
け後年諸事を助けて父の仇を山伏山討て
仙女去来見と昇天する奇談奇事といふ

彌生佐久屋 六冊

彌生佐久屋
彌生の長女 因幡左近の女児 弥生と 佐念源八
の 因幡の神子 弥生と 藤二郎が胆勇 敵軍の
を 除け 又 出羽の里を 極富の女児 向雲流の奇
此 松本軍を 騙術 秋山大雁が 経友八巻 雷
重九が 賊に 八流の 秘を 久り

標因縁車 五冊

標因縁車
小半半 湯が 小半金と 彦巻を 傳
迷 煩悩の 常念法師が 及 下 家の 因縁を
怪く 考へ

玉搔頭 五冊

玉搔頭
三光の 櫛の 玉を 玉
高井土の 兵衛を 十去 湯を 家の 意を 再
と 上方 出て 百を 押 した 三 百 釣 兩の 金
と 携 帶 した 路 指 針 山 崎 強 盗 者 四 郎 一 張

龍前の士人東條園書幼年して父助を
夫が仇山中壯二郎を年久まへ伺ひ櫻り後
十和州郡山より復讐せし事實を添へ
了常の借書等紙と云あり

南部 小栗忠孝記 五冊

蘭州南終の士竹内躬吾内藩に執事の士
小栗毛平と往み宿禰人として討殺せし事
小栗が僕を助終子に渡極と云り得り
阿波を小科き主の妻子を告せし事
百二郎小窓く父の仇を報せし事あり

長崎聞見録 五冊

理齋隨筆 六冊

和漢の雜事何れを載れし事あり
益軒中へ以て和蘭と蘭を載りし事あり

金屋金五郎全傳 五冊
消花坂江の市人金五郎が風情ありて
南坂額の小少懐実の膝を食べたり
半附眉を勝りし癖性ありて後小栗將庵
と云りし事ありて和蘭の事あり

輪廻物語 五冊

和漢の史外に事ありし事あり
和漢の史外に事ありし事あり

風流茶人氣質 五冊

和漢の史外に事ありし事あり
和漢の史外に事ありし事あり

東西兩本願寺来由

繪本石山軍記

土屋正義編述 松川半山画

初編 十冊出版
二編 十冊嗣刻

此書ハ本願寺源流より第八代蓮如上人自ら和蘭を子の和後と云
里振お生玉の在り石山法堂と云あり
到り織田信長此地の要害と云り本願寺と云り和蘭と云り
如上人と十一年の戦事本願寺の事あり
配職田の大平派を討つて和蘭を討つ事あり
我同輩人危殆九字の名号の事あり
の英智守を幸と云り和蘭を討つ事あり
和蘭を討つ事あり
之を改了す時和蘭を討つ事あり

森の害を以てハイソウ
 大害と耳を利と知障
 上人の善を以て出で
 清浄と道学を以て
 東西の分を以て
 陸山の遠を以て
 偏不他力を以て
 述るる繪本の讀本
 大阪府下南久寶寺町四丁目
 前川善兵衛

出版人
 前川善兵衛

繡像復讐言山石見英雄録 全 五十部

南海 玉藤主人 編輯
 浪花 一葉斎 秋川芳梅 画

○初編 七冊 糸師人作
 永録 天正の頃 筑前名嶋の勇士 岩見重太郎 橋本李生
 一 浪木至水 正徳の頃 岩見重太郎 橋本李生
 二 浪木至水 正徳の頃 岩見重太郎 橋本李生
 三 浪木至水 正徳の頃 岩見重太郎 橋本李生
 四 浪木至水 正徳の頃 岩見重太郎 橋本李生
 五 浪木至水 正徳の頃 岩見重太郎 橋本李生
 六 浪木至水 正徳の頃 岩見重太郎 橋本李生
 七 浪木至水 正徳の頃 岩見重太郎 橋本李生

浪花書肆 前川善兵衛藏

南久寶寺町心齋橋西入

